Cancioneiros galego-portugues の写本について

岡村　多希子

中世にgalego－português で書かれた詩をおさめた詩集 cancionciro で、今日まで残っているものは、宗教詩を別にすれば、次の三点である。

アジュダ詩集　Cancioneiro da Ajuda (C.A.)

ヴァチカン詩集　Cancioneiro da Vaticana(C.V.)

国立図書館詩集　Cancioneiro da Biblioteca Nacional(C.B.N.)

I. 写本の発見とその状態

1. C.A.

1759年にイエズス会士がポルトガルから追放された際に押収品の中にあったもので、Colégio dos Nobresに移された。Raimundo Nogueira教授によって発見されたのち、ここから、1832年7月にBiblioteca do Palácio da Ajudaに収蔵された。Cancioneiro da Ajudaの名はここに由来する。C.A.はまたCancioneiro do Colégio dos Nobresとも、Livro das Cantigas do Conde de Barcelosとも呼ばれたことがある。前者はColégio dos Nobresにあったためである。Conde de Barcelosの詩集という名は、D. Dinis王の庶子、D. Pedro, Conde de Barcelos(1285～1354)がLivro das Cantigasをカスティーリャ・レオン王のAlfonso XI(1311～1350)に遺贈したことが知られていたところから、C.A.が誤まってそのLivro das Cantigasに同定されたためである。また、Conde de Barcelosの他の著書といっしょに綴じこまれていたためでもある。

写本は88葉の羊皮紙から成る。13世紀の書体で書かれ、その筆跡から推して唯一人のポルトガル人の手で筆写されたと思われる。しかし、筆耕者はこの写本を未完のままにしている。小文字は黒で書かれているが、文頭の大文字は赤と青に彩色されている。しかしその大文字のいくつかが欠けていたり、多くの頭文字が彩色されないまま残っている。予定されていた挿絵の半分ちかくが描かれていないままになっている。詩につくはずのメロディーの音符が欠け、しかも音符のためのスペースは明けてある。筆耕者はversoを脚韻にしたがって筆写せずに、散文のように書き、略字や記号を乱用した。単語はしばしば連続して書かれたり、発音通りに書かれたりして、判読し難い。

310篇のcantigaがおさめてあり、いずれも作者名が記されていない。そのほとんどがcantiga de amorである。

2. C.V.

D. DinisについてのDuarre Nunes de Leãoの1585年の証言 extant hodie eius carmina (今日かれの詩が存在する)に基いて、[1] バチカン図書館を調査していたFernand Wolf が、何度かの調査の末に見出したのが、Codex Vaticanus n.4803であった。

写本は、papel de linho(亜麻製の紙？)228葉から成る。210葉には番号が打ってある。18

葉には番号がなく、他の紙の間にばらばらに挿入されている。紙の大きさは30cm×22cm。 赤いcarneira(羊の皮)の表紙がついている。最初は、紙の中央に一段で記されているが、10頁以降は二段で記されている。あちこちに空欄がある。書体は、15世紀末と16世紀初頭のイタリアの文献に見られるのと同じである。筆跡は二種である。第一の筆跡は、cantiga, rubrica(題名)とanotação(注)のいくつかを記す。第二の筆跡はそれ以外のもの、すなわち、作者名、番号、apostila(傍注)を記している。

各頁の番号のほかに、とびとびに別の番号が書きこまれている。そして、その番号に続いて、他の写本からの抜き書きと思われるような単語が並んでいる。この番号は、第1頁の90からはじまり、第199頁の300に終る。第49頁から第199頁まで、抜き書きは1頁ごとに行われたようである。しかし第1bis頁から第48頁までは数頁づつ行なわれたと思われる。A〜Iまでの9つのアルファベットが数頁ごとに記されているからである。アルファベットは他の写本の符号を表わしているものと考えられる。以上の番号、アルファベットはすべて第二の筆跡である。

上記の事実から、Monaciは、別の写本が存在していて、その写本の符号や番号を、この写本に誰かが書きこんだものと推定する。[2]

1205篇のcantigaをおさめている。

3. "autores portugueses"リスト[3]

Ernesto Monaciは、バチカン図書館で、Codex Vaticanus n.3217に、ポルトガル人作者リストのあるのを発見した。このリストは、"Index verborum seu vocum collectus per Angelum Colotium ex Pertrarcha, Siculo Rege Roberto Barbarino"と題するものに補遺として加えられていた。このことから、リストは、イタリアのユマニストAngelo Colocciの手によるものと推定された。しかもこのリストはすべて、C.V.に注釈を書きこんだ第2の筆跡によって書かれている。

リストに挙げてあるcantigaの数は1675篇である。さらに、リストのポルトガル人作者の大部分はC.V.に第二の筆跡が書きこんでいるのと同じ名前であり、その順序もほぼ同じである。

4. C.B.N.

1878年に、イタリアのIesiちかくにあるPaolo Brancuti de Cagli伯の蔵書中から偶然見出された。

写本は335葉から成る。用紙のサイズは28cm×21cm、用紙の多くが未使用のままになっている。二段に記されている。

cantigaは全部で1567篇、3 cancioneiro 中最も大部である。cantigaには番号がふってあるが、同じ番号が繰返されたり、同じひとつ番号の下に2つのcantigaが書かれるなど、番号のふり方が粗雑である。筆跡は1人以上のものであり、15世紀末に用いられた書体である。元の写本の所有者あるいは複製に関心のあった人物が1人以上の筆耕者に作業を委ねたものと推察される。

また多くのestrofeが脱落したり(しばしば最初のestrofeだけしか書いていない)、筆写が不完全な状態のままになっていることなどから、元の写本そのものが相当破損していたことが伺われる。

作者名とrubricaがいくつか書きこまれているが、筆跡は、cantigaの筆跡とは別である。書体は16世紀のものである。その筆跡は、ポルトガル人作者リストのと同じであり、そのことから、リストの

作成者すなわちA. Colocciが16世紀に記入したものと考えられる。

注は、作者名、欄外メモ、欠落を埋めるために用うべきテキスト名などから成っている。

写本は、Brancuti伯の手から、1880年にMonaciに借用という形で渡り、のち1888年にMonaciに正式に買取られた。そして、たび重なる交渉ののちに、1924年、ポルトガルのBiblioteca Nacional de Lisboaに入った。Cancioneiro de Colocci Brancutiの命名はMonaciによるもの。のちにCancioneiro da Biblioteca Nacionalと呼ばれるようになったのは、以上の経緯からである。

Ⅱ. 3つのcancioneiro およびポルトガル人作者リストの相互関係

1. C.A.のcantiga 310篇のうち246篇は、C.V.とC.B.N.とに共通である。C.A.独自のcantigaは64篇である。
2. 写本の書体から推して、C.A.は13世紀に、C.V., C.B.N.は16世紀に成立した。3者はともに深い関係にあるとはいうものの、C.A.と後二者との間には可成りの経緯があるものと推測される。
3. C.V.とC.B.N.とはきわめて近い関係にある。C.V.の1205篇のうち1097篇がC.B.N.に見出される。C.B.N.の第1～390番がC.V.には欠けているが、あとはほとんどすべて、同じcantigaが両cancioneiroにほぼ同じ順序で記されている。
4. C.V.とC.B.N.との関係は、写本に書きこまれたrubrica等の筆跡から考えて、次のように断定することができる。
   イ. C.V.もC.B.N.もともに、16世紀のある時期に、イタリアのユマニストAngelo Colocciが自分の研究用に筆写させたものである。
   ロ. C.V.のrubricaが、C.V.より大部なC.B.N.を参考にして記入されているわけではないことから判断すると、Colocciは、C.V.とC.B.N.のほかに、これらよりさらに古いしかもさらに完全な第3のテキストを知っていた。
   ハ. その第3のテキストが恐らくはC.B.N.のオリジナルだったのであろうと推測して、イタリー人研究家Giuseppe Tavaniは次のように想像する。写しとらせたC.V.をより完全な第3のテキストとつき合わせる機会のあったColocciは、C.V.に両テキストの相違点やメモを書きこんだ。そして、第3のテキストがC.V.の多くの脱落部分を補うことのできることを確かめたので、その第3のテキストのコピーを作らせた。それがC.B.N.である[(4)]、と。
5. C.V., C.B.N.とポルトガル人作者リストとの関係はどうか。Colocciの筆跡によるリストは、C.B.N.のオリジナルよりもさらに古いテキストに基いて作られたリストのコピーと考えられる。Colocciが直接にそのテキストから作ったものではない。そのテキストをColocciは直接に手にすることはできなかったと思われる。リストの基になったテキストは、C.B.N.のオリジナルより明らかに大部なものである。したがって、もしColocciがそれを利用することができたとしたら、単にリストを作るに留まらず、手持ちのC.V.とC.B.N.の欠落部分を埋めるのに使ったであろうが、現実にはそういうことをした

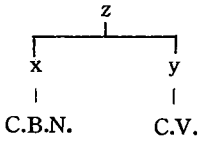
形跡がないからである。[5] ここにリストのオリジナルの基になったテキストの存在が浮かび上がる。

Ⅲ. 系統図

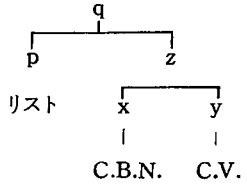
Tavaniは、以上のことを含め、その他さらに写本を精しく調査した上で、cancioneiro の系統図作成を試みた。そのような試みはcancioneiro研究史上はじめてのことであり、大変興味深いので、以下に紹介したい。

1. 系図は、C.V.とC.B.N.との間接的原典(yとx)が同一のテキスト(z)であろうという推測から出発する。TavaniがC.V.とyとの間にもうひとつy'を想定するのに対し、L. Cintra はyだけでもよいのではないかと考えている。[6] ここではCintraの意見に従うことにする。(第1図)

先に述べた通り、ポルトガル人作者リストの基礎になったテキスト(p)は、xではない。リストを詳しく分析したTavaniは、pはzよりさらに古い別の写本(q)から出たものであり、qはまたzのオリジナルでもある、と想像する。したがって、qは、Colocciの手を経た3点の文書のいわば大元ということができる。(第2図)

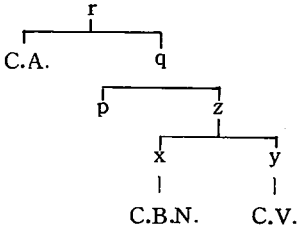


第1図



第2図

2. では、これらイタリアで発見された写本の系図とC.A.との関係はどうであろうか。両者を注意深く対比した結果、次のように言うことができる。すなわち、C.A.はqから発したものではないが、C.A.もqもともに、共通するtexto (原句)の選択や配列に関してはきわめてよく一致する。場合によっては誤りまで同じである。したがって両者はともに共通の原典(r)に由来すると考えざるを得ない。このようにして、3 cancioneiro の系統図ができあがる。(第3図)



第3図

Ⅳ 写本の成立年代

rからqへ、qからzへ、zからxへと新たな写本が生まれる度に、元の写本の字句が訂正・加筆され、さらに新しい詩が加えられていった。これらの増補部分を類別し、その成立年代を確定することに

よって、各写本の成立時期をある程度推定することができる。

1. C.V., C.B.N. およびリストのオリジナル写本の3者の元になったと思われるqには、その銘句がSa-ladoの役(1340)に言及しているAlfonso XI 作とされるカスティーリャ語によるcancão (C.V. 290)と、レオンのjogral João のcantiga(C.V. 707)とが含まれていたと考えられる。 そのcantigaには次のような一節がある。

yfant dõ P.〔Pedro〕 seu
filho〔de D. Afonso Ⅳ〕q̃ sa ventura〔sáventura〕
a hũ grandusso〔grand'usso〕matar[7]
(大熊を殺さんとするその子、親王D. Pedro)

未来の王である親王D. Pedro(1320〜1367)を賛えたものであるが、これはD. Pedro 15才以降のことと考えられるので、したがって、このcantigaは少なくとも1335年以降に書かれたものと思われる。以上のことからqの成立は、1340年以降と推定される。

2. ところで、D. Dinisの庶子Conde de Barcelos, D. Pedro(1285〜1354)は、1350年3月30日付Lalim発の遺書の中で、甥のCastilha-Leão 王Alfonso XIに"meu Livro das Cantigas"を贈ると記している。このLivro das Cantigasの内容については何ら触れていないところから、これをcancioneiro に関係づける説が、従来、何人かの研究者から出されている。たとえば、A. Bellは、C.A., C.V., C.B.N.の大元になったcancioneiroはD. Pedroが編纂したもので、Alfonso XI に贈るとしているLivro das Cantigasである、と述べている。[8] またC. Pimpãoは、D. Pedroの周囲には、D. Pedro自身と同時代の詩人たちの詩をおさめた詩集編纂を考えるような人物は、かれ自身を措いてはいないから、D. PedroのいうLivro das Cantigasとは、C.V.とC.B.N.の直接的ないし間接的原典を指すとし、したがって(文言にはしていないが)その原典はD. Pedroが編んだものであることを言外にほのめかしている。[9]

先の系統図を作ったTavaniは、14世紀(1340年以降)に成立したと推定されるqを、D. PedroのLivro das Cantigasに同定し、したがって、qの成立時期を1340年から、Pedroの遺書の日付である1350年までの間とみる。[10]

3. 最近の研究の結果、C.V.あるいはC.V.とC.B.N.とに含まれる幾篇かのcantiga が14世紀中庸より相当あとの作品であることが明らかになってきた。中でも年代が最も確実にわかるのは、C.V.に見出される、Luís Vasquezにあてた<Cantor do senhor Infante>Alvaro Afonsoというもののpregunta(C.V. 410)である。Alvaro Afonsoは、親王D. Pedroの摂政時代の最後の数年とAfonso Vの治世(1446〜1481)のポルトガル宮廷の活動的一員であったことがわかっており、[11] したがって、C.V.のオリジナルyの成立は、15世紀中庸以降とみることができる。

4. cancioneiroの出発点であるrは、L.Cintraによれば、既存の個人詩集あるいはジャンル別詩集から集めた詩を誰かが一本にまとめたものである。Cintraはrの成立時期について次のように言う。rが、文字、書法、挿絵のスタイル、飾り文字の様式がCantigas de Santa Mariaに大変よく似ているC.A.のオリジナルであるとすれば、rは、Alfonso X(1221〜1284)の時代、すなわち13世紀の第2、第3四半期に編纂されたのではないか。rはジャンル別に編纂される予定だったのであり、そのイニシャチブをとったのは Alfonso Xではあるまいか、と。[12] ところで、Alfonso Xは歴史学の分

野でCrónica Generalをのこし、その影響をうけて、曽孫Conde de Barcelos, D. Pedroはそのポルトガル版Crónica Geral de Espanha de 1344を著した。先述のとおり、Tavaniが推定しているようにqをD. Pedro編纂によるものと考えるならば、Alfonso XのD. Pedroへの影響は歴史だけではなく詩の分野にも及んだと言えよう。

注

1) Aubrey Bell, Portuguese Literature, London, 1970, p. 39 から引用したもの。
2) Ernesto Monaci, Il Canzoniere Portoghese della Biblioteca Vaticana, Halle, 1875, pgs VII-VIII.
3) ポルトガル語文献ではすべて Catálago あるいは lista de "autores portugueses" とあり，原題を挙げていない。
4) Giuseppe Tavani, Poesia del duecento nella Penisola Iberica. Problemi della lirica galego-portoghese, Roma, 1969, P. 114.
5) idem, pgs 126–127.
6) Concioneiro Português da Biblioteca Vaticana (cód 4803), Lisboa, 1973, p.XII
7) Costa Pimpão, Idade Média, Coimbra, 1959, p. 57 から引用したもの。
8) A. Bell. op. cit., p. 38
9) C. Pimpão, op. cit., p. 57
10) G. Tavani, op. cit., pgs 136 - 137
11) idem, p. 143
12) Canconeiro Português da Biblioteca Vaticana (Cód 4803), p. XVI

以上を書くにあたって

特に，Cancioneiro Português da Biblioteca Vaticana (Cód 4803),Lisboa, 1973のIntroduçãoを参考にした。そのほかの参考文献としては，

A. Bell, Portuguese Literature, London, 1970

J. J. Nunes, Cantigas de Amigo dos Trovadores Galego Portugueses, Lisboa, 1973

C. Pimpão, Idade Média, Coimbra, 1959

F. Ramos, História da Literatura Portuguesa, Braga, 1963

Dicionário das Literaturas Portuguesa, Galega e Brasileira, Porto.

História de Portugal, Barcelos, 1928 – 1937のvol. II を用いた。